

## 第177回 岡山外科会

日 時：平成26年11月1日（土）13：00～

場 所：津山中央健康管理センター 3階 津山慈風会記念ホール

会 長：林 同 輔

（平成26年11月5日受稿）

### 1. 一側上肢に生じた多発骨折の治療経験

津山中央病院 整形外科

佐藤嘉洋， 福田祥二， 金丸明博  
高城康師

我々の経験した左上肢の多発外傷例を報告する。症例は26歳男性でバイク事故で受傷した。左上腕骨骨幹部・橈骨骨幹部・橈尺骨遠位端に骨折を認め、尺骨骨幹部・示指中節骨に開放性骨折を認めたので洗浄・鋼線固定等施行し、二期的に上腕・前腕・手関節に固定術を行った。後に環指MP関節内骨折・有鉤骨骨折が判明し固定を追加した。同一肢の多発外傷の場合、治療計画が重要であり、受傷部が診断しにくいので注意が必要であった。

### 2. 後腹膜出血を認めIVRにて止血した臀部創の一例

岡山市立市民病院 救急センター，外科

長田有生， 大村泰之， 桐山英樹

31歳男性が勤務中に転倒し、竹が臀部肛門右側より刺さり徐々に腹痛が生じ前医受診。CTにて後腹膜出血と診断され搬送された。来院時は自制できないほどの腹痛を伴っており、直ちにDynamic CT撮影。左内腸骨動脈の分枝より造影剤漏出を認めたため、コイル塞栓術を施行した。創などに伴う出血は初診時に症状軽度でも急速に悪化する可能性があり、慎重な対応が必要と考える。出血を伴う場合は止血が最優先されるが、臓器損傷や感染のチェックは重要と考える。

### 3. 回盲部手術後に上腸間膜静脈血栓症をきたした2例

岡山労災病院 外科

吉田亮介， 杉本龍馬， 宮内俊策  
脇直久， 河合央， 平山伸  
石崎雅浩， 西英行， 山下和城

症例1：57歳，男性。上行結腸多発憩室症，回盲部腫瘍に対して腹腔鏡下回盲部切除術を施行した。術後18日目に上腸間膜静脈から肝内門脈に及ぶ血栓を認めたため抗凝固治療を開始し，その後著明に縮小した。症例2：22歳，男

性。穿孔を伴う急性虫垂炎に対して腹腔鏡下虫垂切除術を施行した。術後4日目に上腸間膜静脈と肝内門脈に血栓を認めたため抗凝固治療を開始し，術後2ヵ月現在ワーファリン継続中である。

### 4. 大動脈解離を合併した脾十二指腸動脈瘤に対してコイル塞栓を施行した一例

川崎医科大学 総合外科学

磯田竜太郎， 石田尚正， 平林葉子  
高岡宗徳， 深澤拓也， 林次郎  
繁光薫， 吉田和弘， 山辻知樹  
中島一毅， 浦上淳， 森田一郎  
羽井佐実， 猶本良夫

症例は52歳男性。咳漱，背部痛が出現し，他院にて左肺気胸と診断され胸腔ドレーン挿入され入院となった。その後，嘔吐が続きCTにて大動脈解離，脾頭部の動脈瘤を指摘され，当院転院となった。大動脈解離は手術適応でなく血圧管理を行い，動脈瘤に対して放射線科にてコイル塞栓術を施行した。術後経過は良好であり，術前のCTにて認められていた動脈瘤周囲の血腫による十二指腸の経過障害も改善し，術後25日目に退院となった。

### 5. 十二指腸乳頭部に発生した神経内分泌腫瘍の1例

川崎医科大学附属川崎病院 臨床教育研修センター<sup>a</sup>，川崎医科大学 総合外科学<sup>b</sup>

廣瀬一樹<sup>a</sup>， 浦上淳<sup>b</sup>， 磯田竜太郎<sup>b</sup>  
石田尚正<sup>b</sup>， 平林葉子<sup>b</sup>， 高岡宗徳<sup>b</sup>  
深澤拓也<sup>b</sup>， 林次郎<sup>b</sup>， 繁光薫<sup>b</sup>  
吉田和弘<sup>b</sup>， 山辻知樹<sup>b</sup>， 中島一毅<sup>b</sup>  
森田一郎<sup>b</sup>， 羽井佐実<sup>b</sup>， 猶本良夫<sup>b</sup>

十二指腸乳頭部に発生する神経内分泌腫瘍は比較的まれである。今回，混合型腺神経内分泌癌の1手術例を経験したので報告する。黄疸と全身倦怠感を主訴に来院した74歳の男性。十二指腸乳頭部癌の診断で脾頭十二指腸切除術を施行した。病理組織検査では乳頭腺癌に加え，神経内分泌

癌が認められた。免疫組織染色ではCD56, Chromogranin A, シナプトフィジンが陽性であった。術後3ヵ月で多発性肝転移が出現し化学療法を行った。

## 6. Mesodiverticular vascular band による絞扼性イレウスの一例

津山中央病院 外科

橋本将志, 林 同輔, 小島千晶  
佐藤浩明, 宮本 学, 窪田康浩  
松村年久, 木村幸男, 野中泰幸  
宮島孝直, 黒瀬通弘, 徳田直彦

症例は11歳男子。腹痛と嘔吐を主訴に救急受診し、絞扼性イレウスの診断で緊急手術となった。手術所見ではメッケル憩室を認め、その先端から伸びる索状物により腹腔内異常孔を形成し内ヘルニアを起こしていた。索状物を切離して絞扼を解除し、憩室を切除して終了した。術後経過は良好であった。これは Meckel 憩室による絞扼性イレウスの中でも比較的稀な mesodiverticular vascular band による症例で、病理学的にも証明出来たため、文献的考察を加えて報告する。

## 7. 腹腔鏡下肝嚢胞開窓術のピットフォール

岡山大学病院 消化器外科

森廣俊昭, 信岡大輔, 佐藤博紀  
安井和也, 高木弘誠, 杭瀬 崇  
内海方嗣, 吉田龍一, 榎田祐三  
篠浦 先, 八木孝仁, 藤原俊義

巨大肝嚢胞に対する腹腔鏡下肝嚢胞開窓術は安全で比較的平易な術式とされるが、いくつかのピットフォールが存在する。当院で経験した最近の4症例をビデオを用いて提示し、注意すべき点につき述べる。安全な手術のためには、術前画像検査でのグリソンおよび肝静脈の走行の把握が重要であり、症例ごとに入念な手術計画を立てて手術に臨むべきである。

## 8. 当科における腹腔鏡下手術シミュレーターを用いた研修医・学生教育の試み

川崎医科大学 総合外科学

石田尚正, 浦上 淳, 磯田竜太郎  
平林葉子, 高岡宗徳, 深澤拓也  
林 次郎, 繁光 薫, 吉田和弘  
山辻知樹, 中島一毅, 森田一郎  
羽井佐 実, 猶本良夫

我々は、この度腹腔鏡下手術シミュレータ LapPASS LP100 を導入した。この装置には訓練アプリケーションと

して、基本手技訓練ソフトウェア、手術時緊急対応訓練ソフトウェア、トロッカーシミュレーション、診療科別手術訓練ソフトウェアがインストールされている。その中の基本手技訓練ソフトウェアを用いて、研修医及び学生の手術手技の評価を行った。検討した手技は、斜視内視鏡操作、clipping 操作など4手技のシミュレーションを選択した。手技の評価について検討するとともに、今後の学生教育及び研修医教育の一環としてのシミュレーターを用いることの意義について検討を行ったので、途中経過ではあるがここで報告する。

## 9. LECS を行った胃 GIST の2例

川崎医科大学附属川崎病院 臨床教育研修センター<sup>a</sup>, 川崎医科大学 総合外科学<sup>b</sup>

谷口美季<sup>a</sup>, 繁光 薫<sup>b</sup>, 磯田竜太郎<sup>b</sup>  
石田尚正<sup>b</sup>, 平林葉子<sup>b</sup>, 高岡宗徳<sup>b</sup>  
深澤拓也<sup>b</sup>, 林 次郎<sup>b</sup>, 吉田和弘<sup>b</sup>  
山辻知樹<sup>b</sup>, 中島一毅<sup>b</sup>, 浦上 淳<sup>b</sup>  
森田一郎<sup>b</sup>, 羽井佐 実<sup>b</sup>, 猶本良夫<sup>b</sup>

胃粘膜下腫瘍に対する腹腔鏡下胃部分切除は確立された手技であるが、胃内発育型の腫瘍や腫瘍の局在によっては腹腔鏡下アプローチが困難であったり、過剰な胃壁切除のため術後胃の変形や通過障害をきたすことがある。当施設では胃内発育型 gastrointestinal stromal tumor (GIST) に対して LECS を施行し、切除後胃の変形や通過障害を来すことなく良好な結果を得た2例を経験したのでビデオを供覧し報告する。

## 10. 十二指腸カルチノイドに対し LECS を施行した1例

津山中央病院 外科

高橋達也, 小島千晶, 橋本将志  
佐藤浩明, 宮本 学, 窪田康浩  
松村年久, 木村幸男, 野中泰幸  
林 同輔, 宮島孝直, 黒瀬通弘  
徳田直彦

症例は82歳男性、十二指腸球部後壁に7mm大のカルチノイドを認め LECS による切除の方針となった。内視鏡・腹腔鏡にて腫瘍を観察。内視鏡にて病巣をテスト吸引、腹腔鏡にて漿膜面が吸引されるのを確認しスネアをかけて切除。切除部位を内外から観察すると穿孔していたため連続縫合閉鎖。内腔からも内視鏡下でクリップにて縫縮した。術後経過良好で第3病日より流動食開始、第9病日に退院した。病理検査にて断端陰性を確認した。

## 11. 当科における食道悪性黒色腫の治療経験

岡山大学病院 卒後臨床研修センター<sup>a</sup>, 消化管外科<sup>b</sup>

八木朝彦<sup>a</sup>, 白川靖博<sup>b</sup>, 賀島 肇<sup>b</sup>  
前田直見<sup>b</sup>, 田辺俊介<sup>b</sup>, 櫻間教文<sup>b</sup>  
野間和広<sup>b</sup>, 藤原俊義<sup>b</sup>

食道悪性黒色腫は食道悪性腫瘍の中でも極めて稀な腫瘍であり, その悪性度の高さから予後は極めて不良とされている. 遠隔転移のない症例では手術治療を第一選択としており, 手術による根治的切除から術後の化学療法に至る集学的治療を行うことが多い. 当科における食道原発悪性食道黒色腫 5 症例の治療経験について, 文献的考察とともに報告する.

## 12. 開心術後縦隔炎に対して大網充填術を行った後, 横隔膜ヘルニアを来した 1 例

心臓病センター榊原病院 外科

玉木孝彦, 田村健太郎, 都津川敏範  
吉鷹秀範, 津島義正

症例は80歳の女性で, 2012年5月にAVRを行い, その後, 胸骨骨髓炎にて大網充填術を行った. 退院後, 食欲不振にて来院し, CTにて横隔膜ヘルニアを来し, 縦隔内に胃が挙上していることを指摘された. 2013年5月に開腹手術を施行, 胃を整復してヘルニア門をパッチ閉鎖した. 術後食欲良好にて退院したが, パッチ感染にて10月にパッチ除去を行い, 現在は, ヘルニアの再発および感染は認めず, 外来加療中である.

## 13. 局所制御に Mohs ペーストが有用であった進行乳癌の 2 例

津山中央病院 外科

佐藤浩明, 小畠千晶, 橋本将志  
宮本 学, 窪田康浩, 松村年久  
木村幸男, 野中泰幸, 林 同輔  
宮島孝直, 黒瀬通弘, 徳田直彦

Mohs ペーストは, 塩化亜鉛を主成分とする組織固定剤で, 皮膚の悪性腫瘍などの chemosurgery に応用されており, 近年は進行乳癌に対する緩和ケアへの応用も報告されている. 今回多発転移を有する局所進行乳癌に内分泌化学療法と併用して Mohs ペーストを使用することにより, 悪臭・出血・滲出液の減少等の症状緩和が得られるとともに, 早期の腫瘍縮小効果を得ることが出来た 2 例を経験したので報告する.

## 14. 当院における外傷性横隔膜損傷手術症例の検討

津山中央病院 外科

宮本 学, 高橋達也, 小畠千晶  
橋本将志, 佐藤浩明, 窪田康浩  
松村年久, 木村幸男, 野中泰幸  
林 同輔, 宮島孝直, 黒瀬通弘  
徳田直彦

外傷性横隔膜破裂は重度多発外傷の 1 損傷として稀に認められる疾患である. 多くの場合緊急手術の適応であり, 合併損傷の治療の優先順位を考慮しつつ治療に望むことが肝要である. 2000年9月から2014年7月までに当院で経験した外傷性横隔膜破裂 6 症例について多角的に検討を行った.

## 15. 解剖学教室とのコラボレーションによる肝胆膵外科手術教育

岡山大学病院 消化器外科<sup>a</sup>, 集中治療部<sup>b</sup>, 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科 人体構成学<sup>c</sup>

信岡大輔<sup>a</sup>, 近藤喜太<sup>a</sup>, 森廣俊昭<sup>a</sup>  
高木弘誠<sup>a</sup>, 藤 智和<sup>a</sup>, 吉田一博<sup>a</sup>  
杭瀬 崇<sup>a</sup>, 内海方嗣<sup>a</sup>, 吉田龍一<sup>a</sup>  
楳田祐三<sup>a</sup>, 篠浦 先<sup>a</sup>, 武田吉正<sup>b</sup>  
大塚愛二<sup>c</sup>, 八木孝仁<sup>a</sup>, 藤原俊義<sup>a</sup>

岡山大学では, 外科医による手術に即した遺体解剖を高性能 3D カメラで撮影して臨場感溢れる解剖教材を開発し, さらに遺体を用いた各臓器の手術解剖セミナーを主催して大きな成果を上げている. 肝胆膵外科領域では近県施設より応募のあった若手外科医を対象に膵頭十二指腸切除術の手術トレーニングを行い, 非常に好評であった. 近年のわれわれの取り組みを紹介する.

## 16. 右腎動脈瘤に対してベンチ手術を行い自家移植した 1 例

国立病院機構岡山医療センター 心臓血管外科

溝渕雅彦, 横田 豊, 林田智博  
徳永宜之, 中井幹三, 岡田正比呂

腹腔内動脈瘤は比較的稀な疾患であり, 偶発的に診断されることが多い. しばしば外科的な治療が必要となり, 手術方法は症例ごとに検討されている. 今回我々は右腎動脈瘤に対してベンチ手術を行い自家移植した 1 例を経験したので, 文献的検討を加え報告する. 症例は60代女性で, 腹部 CT で右腎門部に径19mmの腎動脈瘤を認め, 拡大傾向を認めたため外科手術を行った. 経過良好で退院した.

## 17. 悪性リンパ腫と判明した心臓腫瘍の1手術例

国立病院機構岡山医療センター 心臓血管外科

松浦宏昌, 横田豊, 林田智博  
徳永宜之, 中井幹三, 岡田正比呂

心臓悪性腫瘍は比較的稀である。悪性リンパ腫はその内の1～2%と言われている。今回我々は心不全を伴う心臓腫瘍に対し腫瘍摘出を行い、悪性リンパ腫と診断され、術後に化学療法を追加し、経過した症例を経験したので、文献的検討を加え報告する。症例は70代女性で、心不全を伴う右心房内腫瘍の診断で、当院に紹介転院された。右心房内腔をほぼ占めるほどの巨大腫瘍で、三尖弁陥頓の危険性があるため、緊急的手術を行った。

## 18. 心障害を合併した Fabry 病に対し、大動脈弁置換術、僧帽弁形成術、冠動脈バイパス術を施行した1例

岡山大学病院 心臓血管外科

樽井俊, 増田善逸, 宮本陽介  
川畑拓也, 黒子洋介, 佐野俊二

59歳, 男性. Fabry 病による末期腎不全にて腹膜透析中。

僧帽弁逆流, 大動脈弁狭窄, 冠動脈病変に対し手術を行った。術前心筋生検では Fabry 病の所見を認め、心エコーでは左心機能は低下していた。機械弁による大動脈弁置換術, 僧帽弁形成術, さらに3枝冠動脈バイパス術を行った。術後は Af, VT の合併に対して, アミオダロンの投与を要したほかは概ね経過良好であった。術後エコーでは MR trivial と改善し, CAG ではバイパスは開存していた。

## 19. 心臓原発の血管肉腫の1手術例

津山中央病院 心臓血管外科

多屋慧, 劔持礼子, 衛藤弘城  
久保陽司, 松本三明

心臓原発の血管肉腫は稀な疾患である。今回我々は右房原発の血管肉腫に対し、腫瘍切除術施行し良好な長期成績を得られたので報告する。